

◆ 今週のコメント

- 腸管出血性大腸菌感染症の報告が1例あり、本年7例目となっています。患者は10歳代女性で、型別はO157(VT1VT2)、推定感染経路は、経口感染です。
- アメーバ赤痢の報告が3例(腸管アメーバ症 2例、腸管及び腸管外アメーバ症 1例)あります。患者はすべて男性で、年齢は30～50歳代です。推定感染地域は、国内2例、海外1例(大韓民国)で、推定感染経路は、性的接触2例(異性間、同性間各1例)、経口1例となっています。
- A群溶血性レンサ球菌咽頭炎の定点当たり報告数は、1.38(55例)で、本年で最も多くなっています。年齢階級別にみると、5歳が最も多く11例(20.0%)で、次いで、4歳、6歳、及び7歳が各7例(12.7%)となっており、4歳～7歳で58.2%を占めています。
- 伝染性紅斑の定点当たり報告数は、0.53(21例)で、先週に比べ増加しており、平成22年第33週以降、過去5年平均値を上回る状態で推移しています。
- ヘルパンギーナの定点当たり報告数は、0.48(19例)で、4週連続で増加しています。例年、7月～8月のピークに向かって報告数が増加しますので、動向にご注意ください。

◆ 今週のトピックス: <手足口病>

手足口病の定点当たり報告数は、0.80(32例)で、先週(0.18)に比べて急増しています。詳細をトピックスに掲載しています。

◆ 発生状況

全数把握の感染症

- 三類:腸管出血性大腸菌感染症 1例【1月以降の累積報告数 7例】
- 五類:アメーバ赤痢 3例(腸管アメーバ症 2例、腸管及び腸管外アメーバ症 1例)【1月以降の累積報告数 9例】

定点把握の主な感染症

(市内定点数 インフルエンザ定点67、小児科定点40、眼科定点10、基幹定点1)

定点	感染症名	定点当たり報告数	報告数
インフルエンザ*	インフルエンザ	0.25	17
小児科 (降順5位まで)	① 感染性胃腸炎	4.80	192
	② A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	1.38	55
	③ 水痘	0.98	39
	④ 手足口病	0.80	32
	⑤ 伝染性紅斑	0.53	21
眼科	流行性角結膜炎	0.40	4

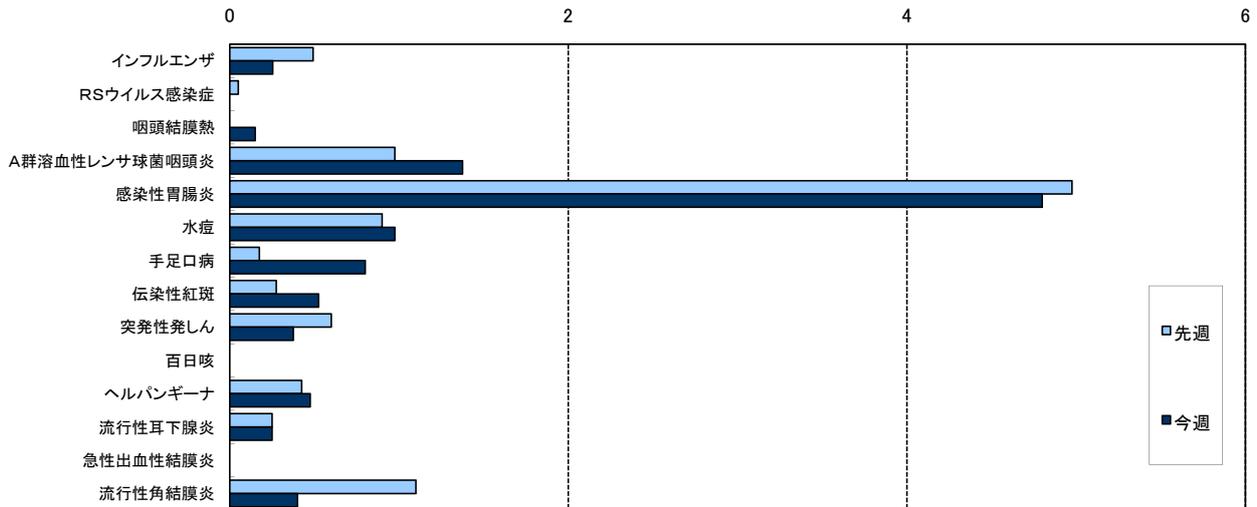
【次ページ以降の主な内容】

発生状況の概況グラフ / 今週のトピックス: <手足口病>

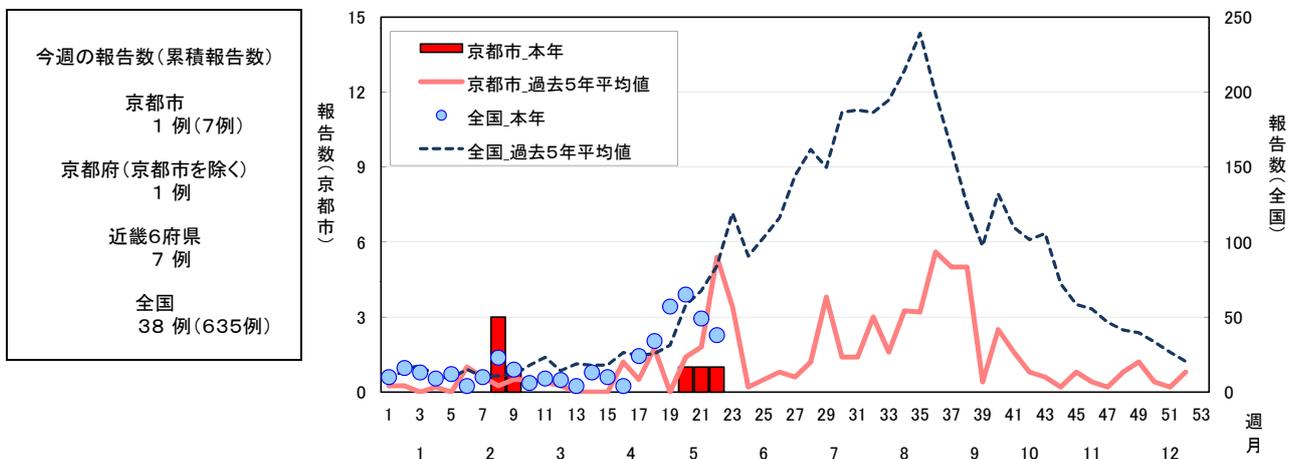
(注)京都市のデータは、平成23年6月9日現在の報告数で、全国の還元データと若干異なる場合があります。また、本情報での患者数は、届出医療機関所在地での集計で、患者の住所を示すものではありません。

◆ 発生状況の概況グラフ

1 今週(第22週)と先週(第21週)の定点当たり報告数の比較

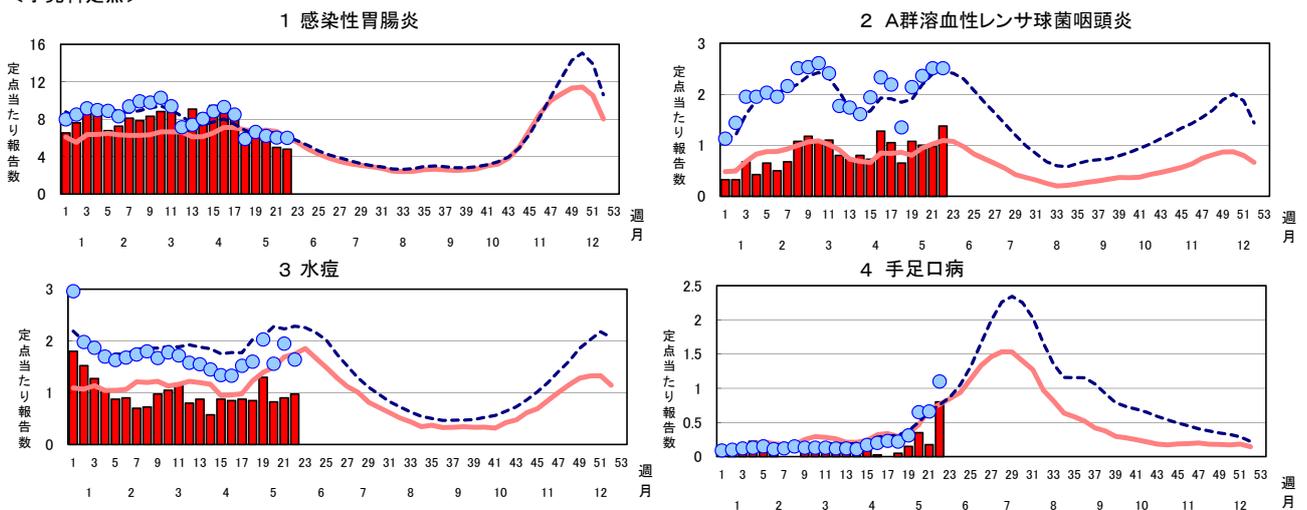


2 腸管出血性大腸菌感染症(三類感染症)の推移

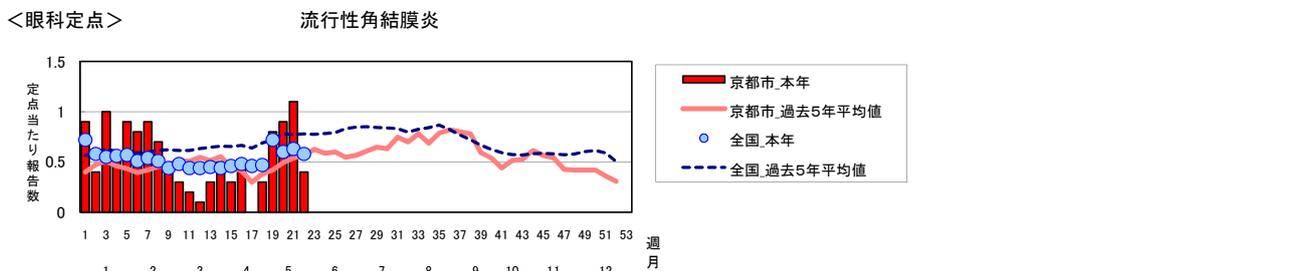


3 主な感染症の定点当たり報告数の推移

<小児科定点>



<眼科定点>



第22週(5月30日～6月5日)トピックス: <手足口病>

手足口病の定点当たり報告数は、0.80(32例)で、先週(0.18)に比べて急増しています。手足口病は、例年、夏季に流行のピークが見られ、今後、更なる患者数の増加が予想されます。

年齢階級別割合をみると、1歳が10例(31.3%)と最も多く、2歳及び3歳が7例(21.9%)で、1～3歳で75%を占めています。行政区別にみると、南区が多くなっています。

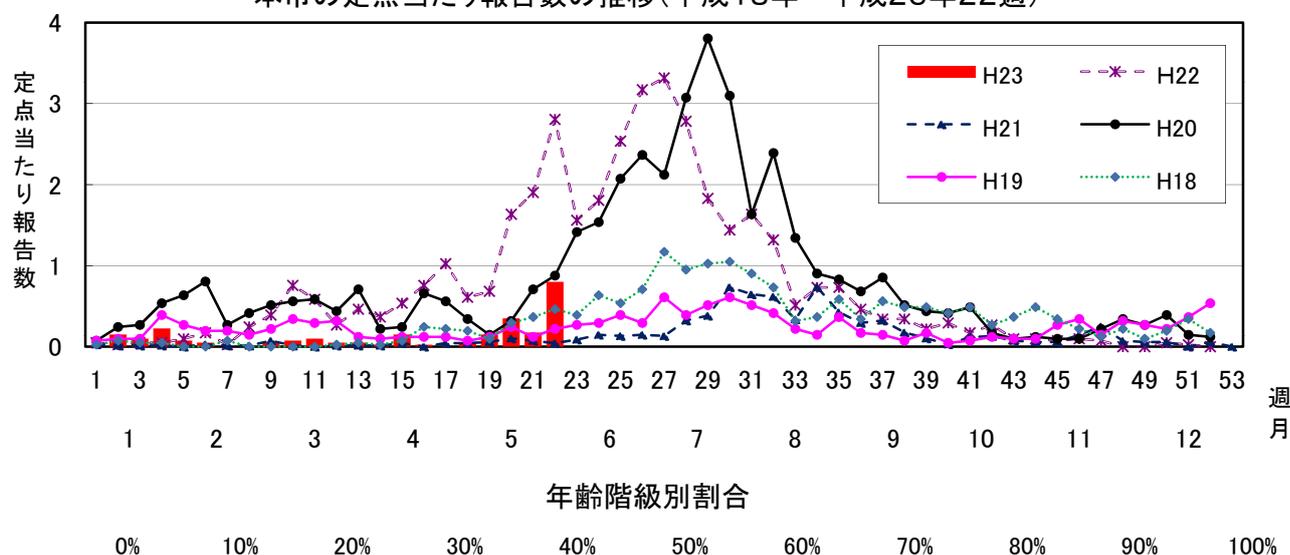
昨年は、手足口病の原因ウイルスの中でも、中枢神経合併症の発生率が高いエンテロウイルス71型(EV71)が多く検出されました。京都市衛生環境研究所で検査を実施した検体中、EV71は、手足口病から10例、無菌性髄膜炎から4例、かぜ症候群及び感染性胃腸炎から各2例検出されました。本年、全国の手足口病の検体からは、6月14日現在、コクサッキーウイルスA型が36例、EV71が2例報告されています。今後のウイルス検出状況にご注意ください。

病原体の検出状況は、下記ホームページをご参照ください。

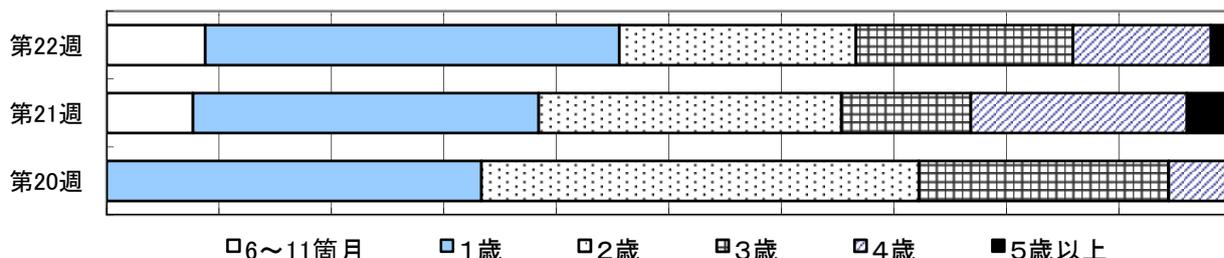
京都市: <http://www.city.kyoto.lg.jp/hokenfukushi/page/0000072537.html>

全国(国立感染症研究所): <http://idsc.nih.go.jp/iasr/prompt/s2graph-kj.html>

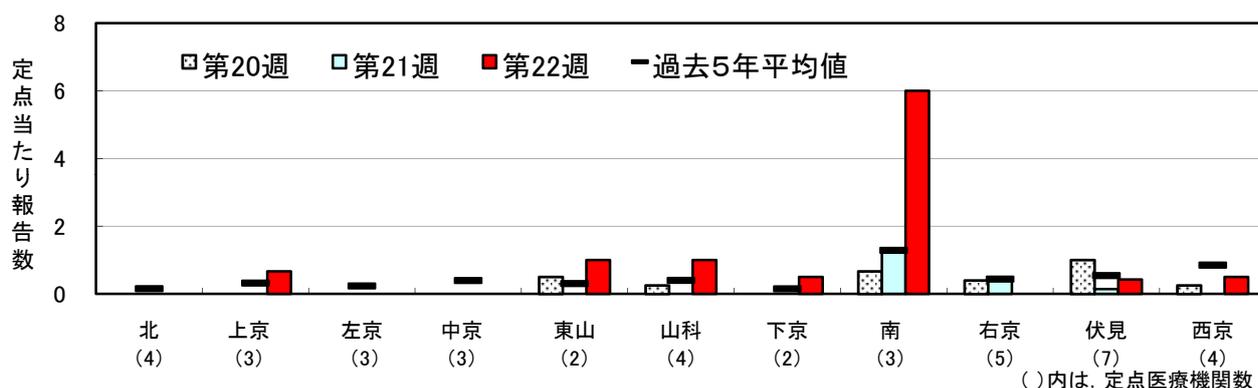
本市の定点当たり報告数の推移(平成18年～平成23年22週)



年齢階級別割合



行政区別定点当たり報告数の推移



()内は、定点医療機関数